

# あの日から二年 いま、私たちに できること——

観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、想定をはるかに超える高さの津波が、東北地方を中心とした広い範囲に壊滅的な被害をもたらした東日本大震災。この震災による死者・行方不明者は、1万9千人を超え、34万人もの人たちが、避難生活を余儀なくされています。地震の後に発生した、東京電力福島第一原子力発電所の事故も大きく影を落とし、復旧・復興には、まだまだ多くの時間を必要としています。そんな中、震災発生直後から現在に至るまで、現地へボランティアとして赴き、被災者の声を、被災地の空気を肌で感じてきた人たちがいます。今月号では、こうした市民の皆さんの活動を通じて、「今回の震災を今一度振り返り、「いま、私たちに何ができるのか」について考えてみたいと思います。」



## 延べ12回、67日間の支援活動 潜水捜索を実施

インタビュー

### ダイビング歴19年のキャリアが駆り立てた衝動

津波による被害が明らかになるにつれ、「自分が行かなければ」と強く思うようになりました。今、活動ができるのは自分しかないと感じていました。水中で捜索活動ができる可能性に賭けて、器材一式を車に積み込み、4月8日の夜、三原を出發しました。

### 岩手県山田町へ到着

目的地である岩手県山田町に到着し



大坪俊彦さん(城町一丁目、三原市消防団東部分団所属)

たのは、4月10日の11時でした。山田町は震災直後、1万9千人の人口のうち、1万4千人が行方不明という状態でした。

陸上での遺体捜索が続き、がれきの撤去もままならず、水中での捜索は、ほとんど手付かずの状況でした。

### 遺族の「納得」へのお手伝い

現地のボランティアセンターや災害対策本部と調整し、漁師さんの協力のもとで、水中での捜索活動ができるこ

とになりました。捜索を開始し、一人のご遺体を引き上げました。遺族の方々はきつと、納得を求めている。水中の真実を知って納得したいのではないかと感じていたので、一人でも多くのご遺体を見つけてあげたい気持ちでいっぱいでした。仮に、ご遺体は見つからなくとも、写真や身の回りの品など、思い出の詰まった物をできる限り引き上げ、心のケアの一端が担えれば、という一心で活動しました。今年1月までに、岩手県や宮城県の5つの町で、こうした活動を行ってきました。そして、これからも継続していくつもりです。

### まだまだ多いボランティアにできること

今、感じていることは、やらなければならぬことが分かっていて、それができる人もいるのに、できないというもどかしさです。ボランティアでは、活動のための資金も限られます。また、距離などの問題から、行きたくても行けないという人たちもいるかも知れません。

まだまだ復興には時間が必要で、ボランティアだからできること、ボランティアでなければできないことも多く残されています。

▲屋根の上の漁船が、津波の高さと破壊力を物語る(3/31 岩手県山田町) 写真提供：小川和子さん



- ①現地で活動する大坪さん(左)(5/10 岩手県山田町)
- ②思い出の詰まったアルバムも海底に(6/21 宮城県石巻市)
- ③津波で押し流された家が沿岸に浮かぶ(6/21 宮城県石巻市)
- ④大坪さんの呼び掛けで、全国から集まったダイビングの仲間たち
- ⑤水中に広がる家財道具(7/5 宮城県石巻市) 写真提供：大坪俊彦さん



インタビュー

日ごろの備えや 人とのつながりの 大切さを実感



三原市ボランティア・市民活動サポートセンター ボランティアコーディネーター 小川和子さん

災害ボランティアセンターの立ち上げ

3月29日～4月6日と、4月27日～5月4日の間、岩手県山田町へ行きま

最初にいったとき、山田町には、ボランティアの需給調整やニーズの把握を行うボランティアセンターが立ち上がっていませんでした。地元の社会福祉協議会や役場の職員も、家や家族を失った被災者である状況下で、災害ボランティアセンターの立ち上げと運営

復興への足取りは鈍く

6月24日～7月3日にかけて行った岩手県釜石市では、主に仮設住宅での生活支援を行いました。阪神淡路大震災の教訓から、仮設住宅内に、孤独死を防ぐための談話室が作られています。その談話室内で、コミュニティが形成できるようなプログラムを作り、多くのサロンが開催されました。

機会を利用し、2カ月ぶりに山田町を訪れた際、いまだに町の中がれきが山のように積み上げられた、変わらない姿を目の当たりにしました。復興への足取りは鈍く、今回の震災のすさ



▲何台もの車が津波で流され折り重なる(3/31 岩手県山田町)

おわりに

継続的な支援と 身の回りづくり

被災地では、5万戸を超える仮設住宅が建てられ、3千人に及ぶ行方不明者の捜索が続いています。

17年前に発生した、阪神淡路大震災においても、最後の仮設住宅が解消されたのは、震災発生から約5年後のことでした。

被災地の復興には、まだ多くの時間がかかります。それと同様に、息の長い支援が必要です。支援活動を継続的なものとするためには、支援する人たちへの支援も忘れてはなりません。また、今回の震災を教訓として、そ

まじさを改めて思い知らされました。 広がる支援の輪

三原市ボランティア・市民活動サポートセンターで把握しているだけでも、会社員、医師、看護師、教員など延べ21人の市民の皆さんが、合計158日間にわたって被災地でボランティア活動を行いました。

また、被災地で土のう袋が不足しているという声に対し、7,320枚の土のう袋が寄せられたり、市内の農家から、ミカンや野菜が提供されたりしました。

三原でも起こりうる 災害への備えを

今回の災害を忘れないことも支援の一つだと思っています。

そのため、私には、経験してきたことを伝えていく役割もあると考え、日ごろの備えや人とのつながりの大切さ、地域の危険箇所や避難場所を確認しておくことなどを話しています。

また、この震災を教訓として、防災関係機関の日ごろからの連携も再確認する必要があると感じています。 私たちの住む三原でも起こりうる災害に向けて備えることが重要です。



▲被災地で力いっぱい咲く桜

それぞれの家庭や地域でできることもたくさんあります。家庭では、日ごろから危険箇所や避難場所を確認することや、非常持ち出し品を準備しておくことなどが挙げられます。地域においては、自主防災組織の設立や防災訓練の実施などが考えられます。

東日本大震災から一年を迎えるに際し、いま、私たちにできることをもう一度考えてみませんか。

危機管理室 0848・67・6066

イベント紹介

みはら震災復興支援 チャリティー・ガラ公演

いま三原から被災地へ「熱い絆」を届けよう!

とき 11日(日)15時～  
ところ 芸術文化センター ポポロ ホール  
出演 川島成道、原田真二、東京合唱協会 (指揮:内藤 彰)、渡辺朋子、みはら<絆>オーケストラ、みはら<絆>市民合唱団  
入場料 3,000円  
※一人4枚まで購入できます。小学生未満は無料。  
販売場所 ポポロ、ポポロオンライン、うきしろロビー(JR三原駅構内)ほか  
※ホワイエで、阪神淡路大震災・芸予地震・東日本大震災のパネル展があります。



市内の合唱団に所属する20人が集まり、この日のために結成しました。メンバーの中には、ボランティアとして被災地へ行った人もいます。当日は、東京合唱協会の皆さんと一緒に、復興への願いを鎮魂曲に乗せて届けます。

みはら<絆>市民合唱団 代表 堺谷雅子さん(円一町五丁目) 観光文化課(☎0848・67・6015)

防災講座① 東日本大震災の被災地取材して とき 18日(日)13時30分～15時30分 ところ ゆめきゅりあセンター(館町二丁目) 講師 毎日新聞社記者 中尾卓英さん 入場料 無料

防災講座② 家族を守る「防災体験」 とき 25日(日)10時～12時30分 ※受け付けは、9時30分から。 ところ 沼田川河川防災ステーション(新倉二丁目) 内容 土のう積み、煙体験、車いす体験、消防車両の見学、防災カルタ大会(景品あり)、炊き出しの試食、パネル展示など ※親子で参加できます。 参加費 無料

危機管理室(☎0848・67・6066)



▲全国からの支援物資を届ける青空市(6/26 岩手県釜石市)



▲仮設住宅内で子どもと遊ぶ岩手大学の学生(5/15 岩手県釜石市)



▲支援のニーズを調査するボランティア(4/4 岩手県山田町)



▲全児童173人が無事だった船越小学校(左)、火災で焼失した市街地(4/3 岩手県山田町)



写真提供:小川和子さん